

2 江戸における上水の始まり

豊臣秀吉の小田原攻めの後、徳川家康が関東を領有することとなりました。

家康は、江戸を関東支配の本拠地と定めましたが、家康が初めて入国した頃（天正 18（1590）年）の江戸は全くの寒村だったといわれています。

海岸線は江戸城大手門近くまで迫り、現在の日比谷公園・皇居外苑のあたりは日比谷入江と呼ばれる浅海でした。また、西の方には武蔵野台地が果てしなく続いていました。

台地には小さな川や湧き水がありましたが、低地では井戸を掘っても、その水質は塩分が強くて飲料水に適していませんでした。このため江戸は、大勢の家臣団を居住させていくことが困難な場所であったといわれています。

そこで、家康は入国するとただちに堀を開削したり、山を切削してその土で日比谷入江などを埋め立てたりして、河川の改修などを行いました。

なかでも、江戸の町に住む人々の生活用水を確保することが重要であると考えた家康は、江戸入国に当たって、家臣の大久保藤五郎に上水をつくるように命じ、藤五郎は、小石川上水を造ったといわれています。

小石川上水の水源や配水方法、経路等について具体的なことは現在もわかっていません。

しかし、小石川上水は江戸における最初の水道となり、その後の江戸の発展とともに神田上水へと発展していきました。